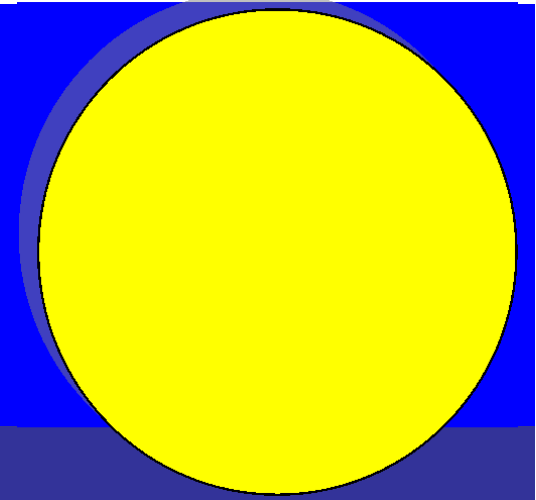
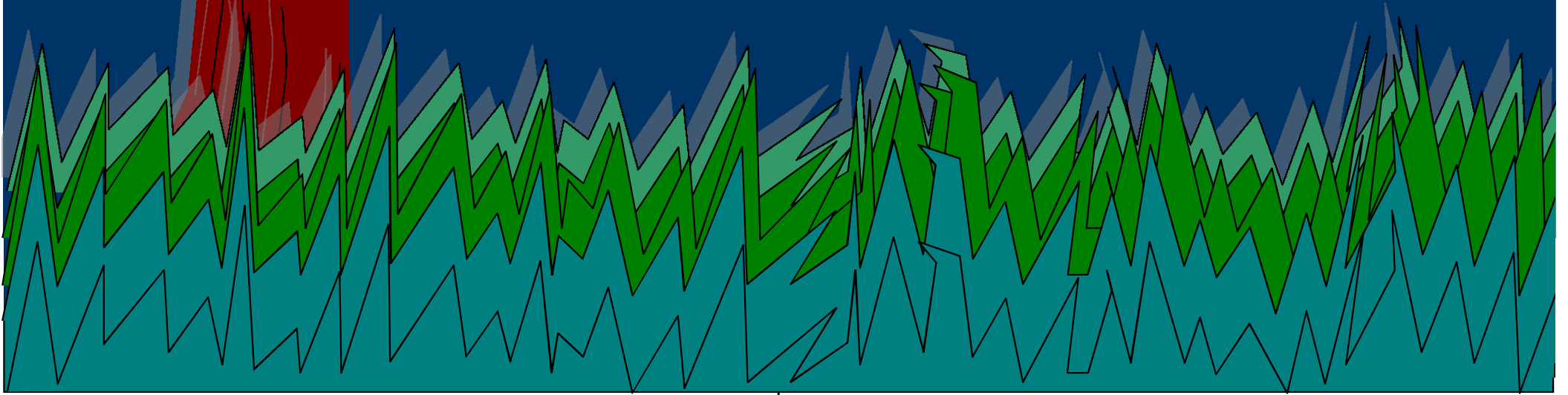


ほー ほー

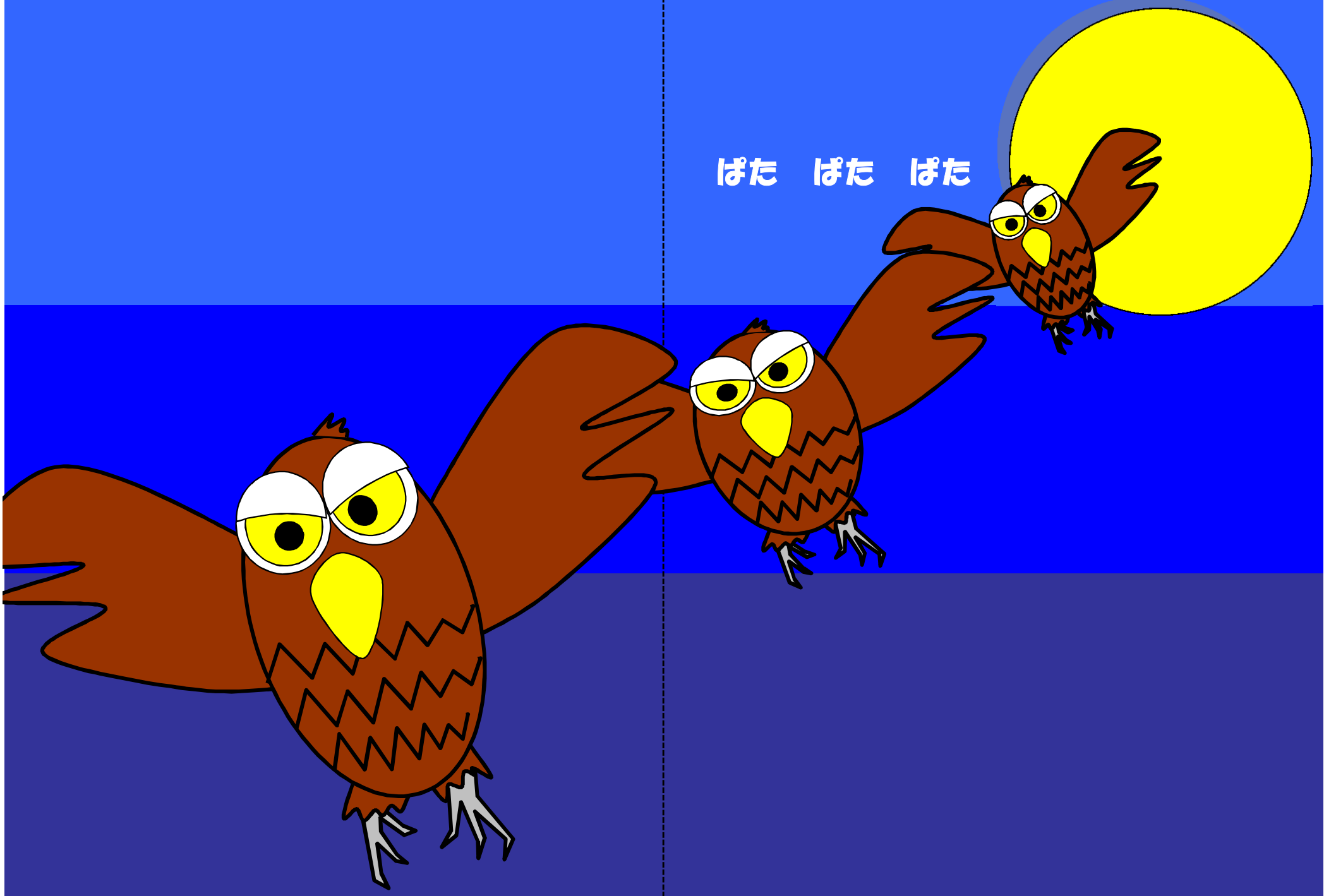


ほたる の ひかり

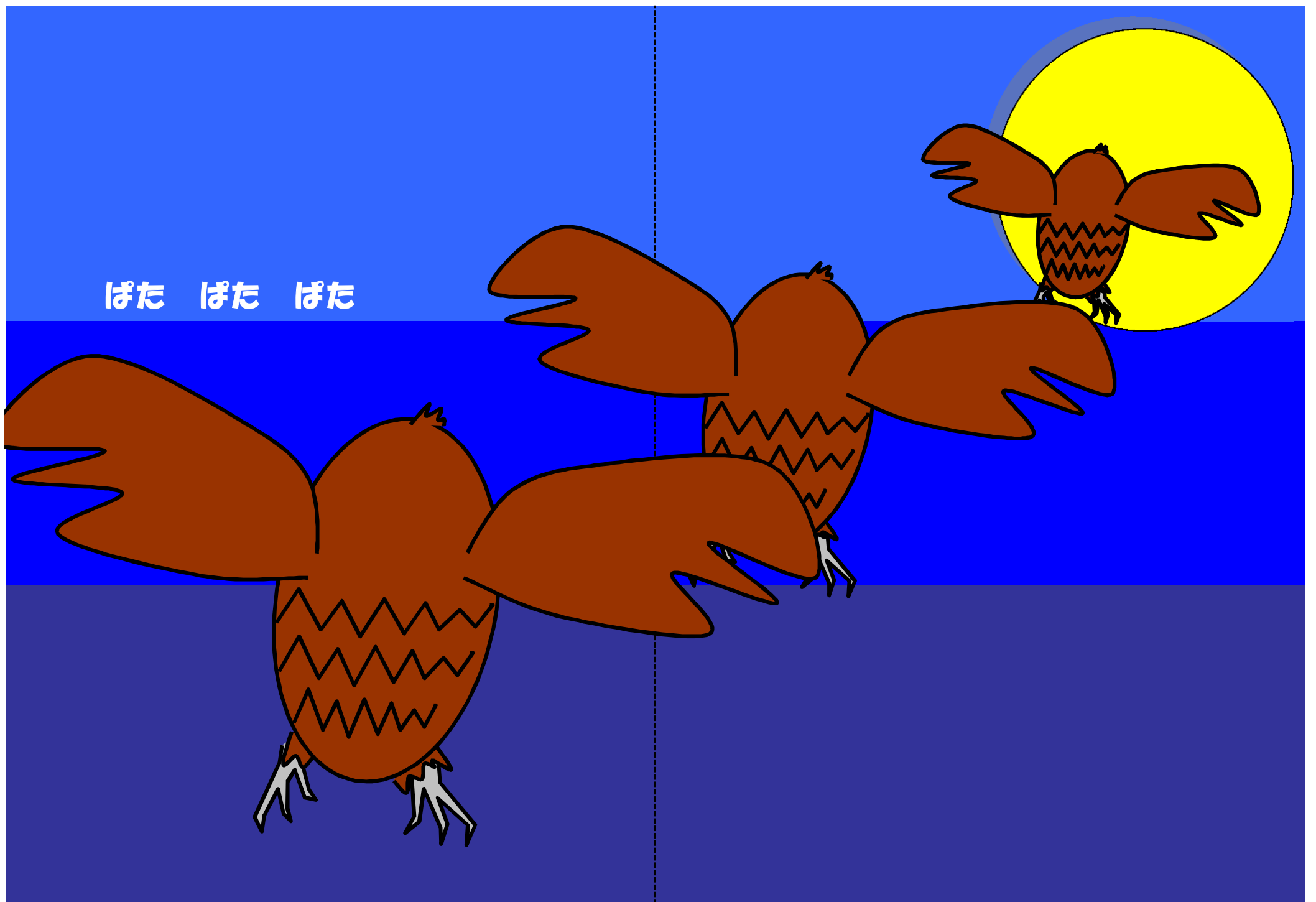
幸徳環境設計



ぱた ぱた ぱた



ぱた ぱた ぱた



ホタルの光

幸徳環境設計

「命をけずって光ること、それになんの意味があるんだ」

六月の下旬、夕やみがあたりをつつむ頃、一匹のゲンジホタルが、小川の岸辺のしめったやわらかな土の中から、ひよっこり頭を出し、地上に姿を現した。

一匹のゲンジホタル、名前を『ゲン』という。ゲンはくりっとした目を大きく見開くと、『プルンプルン』と二回ほどおしりをふって、おしりに付いている泥をふり払った。そして、『ブオン、ブオン』と背中に付いている大きなハネをはばたかせ、幼虫の頃を過ごした小川の水面に向かって飛び立った。

（ゲンジボタルの成虫は、六月から七月頃にサナギから羽化し地上に現れます。成虫は交尾の後に、メスが岸辺の水を含んでぬれているミズゴケなどに産卵します。そして卵は七月から八月にかけて孵化し、幼虫は水の中で成長し冬を越します。幼虫は、水の中でカワニナという巻貝をエサとします。そして四月から五月頃になると、幼虫は岸辺に上陸し、水辺のしめった土の中にドカというマユ状の土の部屋を作りサナギになります。ゲンジボタルは、一年がかりで成虫になるのです。）

小川の水面には、もうすでに数十匹ものゲンジボタルが発光しながら飛んでいる。誰もが幼虫期を過ごした水の中を愛しむように、また空中飛行楽しみながら、おもいおもいに光のダンスを演出する。

「みんな、すごいや。オレも負けていられない。さあ、行くぞ」

と、ゲンは自分に言い聞かせるようにつぶ

やいた。

ゲンは、おもいつきり飛び回り、思う存分発光した。そして、ゲンジボタルたちのダンスの輪に加わった。

そして一時間ほど、ゲンジボタルの仲間たちと、踊り光り続けていると、ハネが少し金色かかった、一風変わったホタルが、ゲンにむかって声をかけてきた。

「おや、新人さんかい。なかなかいい光りっぷりだね。おれは、『キン』っていうんだ。よろしくな」

「あ、うん。ぼくは、『ゲン』っていうんだ。さつき、羽化してきたばかりだから、まだ、よく分からないんだけど、よろしく」

ゲンは、少し不安そうな顔をしながらキンにむかって言った。

「そうか、大丈夫だ。心配するな。オレが何でも教えてやる。オレは三日前に羽化した。だから、おまえより二日ほど先輩だ。まあオレも最初は、何も分からなかった。そして不

安だった。そう、おまえと同じだったな」

キンはそう言うと、胸をはって、切れ長の目を細め、やさしく微笑んだ。

「ねえ、キン。ぼくたちは、大人になったって事だよ。でも、大人になった意味って何なの？」

「ん、それは、それはだな……。ん……。嫁さんがもらえるって事だ。結婚できるって事だ。だからこうして、自分をアピールする。踊って、光って、メスにむかってアピールする。とびっきりのダンスと、とびっきりのライトで、とびっきりのメスをゲットする。そういう事だ。ん、そういう事だ」

「じゃあ、その後は。その後は、どうなるの？」

「ん、それは、それはだな……。ん……。メスが卵をちゃんと産んだら、オレたちの役目は終わりだ。そう、それがオレたちの役目だ。そういう事だ。ん、そういう事だ」

「それって、死んじゃうって事？」

「ん。そうだ。そういう事だ」

「じゃあ、死にたくない時は？」

「ん、それは、それはだな……。ん……。光らなければいい。そう光らなければいい」

「本当。それって、本当」

「ん。ん……。たぶん。エネルギーを使わない分、命のエネルギーが、消費しないって事だ。そういう事だ。ん、そういう事だ」

キンはキン自身、本当は分からなかった。

キンは、ゲンに『死ぬ』という事を質問されるまで、一度も『死ぬ』という事、『命』というものを考えた事などなかった。疑問にも思わなかった。

「じゃあ、光らなければ長く生きられるって事だね。光らなければ、いいんだね。だって、命をけずるような事、しなければいいんだよね」

「そう、そういう事になるな。けどな、ホタルが光らなくて幸せなのか？それが、ホタルって言えるか？そんな事、がまん出来るか？」

オレ、オレはがまん出来ない。だってそうだろう。オレ、ホタルだから」

キンはゲンに対して、そう答える事しか出来なかった。

「ゲン、正直オレにも分からない。だがな、『迷ったことがある時は、森にすむ四羽のフクロウを訪ねてみる』という話を聞いたことがある。正しい答えを教えてくださいという噂だ。オレも幼虫の頃に悩んだ。どうして、こんなにくみにくい姿をしているんだろうと。けれど幼虫の頃、水の中から出られはしない。だから成虫になったら、森のフクロウを訪ねようと思っていた。けれど、もう聞く必要はないと思った。今のオレは、これで十分だ。今が最高だと思う。ゲン、オレが教えてやれる事はこれで終わりだ、元気だな」

キンは最後にそれだけ言うと、ゲンに背をむけて、再び光の輪の中へ飛んでいった。キンは、ひととき強力な光を放ちながら飛んでいった。

ゲンは、キンから教わった四羽のフクロウがすむ森の入口に来た。

「正真道？何だろう」

フクロウがすむ森の入口には、『正真道』と書かれた立札が、まるで迷った者たちを、この入口から続く一本道へ導くように立っていた。ゲンは迷うことなく、森の奥へ奥へと続く、その一本道を飛びながら進んでいった。

しばらく進むと、一本道の脇にひときわ大きな大木が現れた。そして、その大木の前には、『正見道』と書かれた立札があり、その立札の前で、ゲンは立ち止まった。

するといつの間にか、ひときわ大きな大木の影から一羽のメガネフクロウが現れた。

「ホタルよ、何を迷っている」

メガネフクロウが、野太い声で言った。

「正見道って何？」

「正しく見るといふ事だ。オマエは、成虫になるまで、その美しい光を発し、だれからも

好かれるその姿になるまで、何を見てきたんだ。よーく、考えてみなさい」

メガネフクロウは、ひときわ大きな目を見開き、そう言うのと、いつの間にか姿を消していた。

ゲンは、幼虫期の水の中で過ごしていた頃の自分を思い出しながら、また森の奥へ奥へと続く一本道を進んだ。

しばらく進むと今度は、『正聞道』と書かれた立札があったので、ゲンは立ち止まった。すると立札の後ろの大木の影から、いつの間にか一羽のミミズクが現れた。

「ホタルよ、何を迷っている」

ミミズクが、野太い声で言った。

「正聞道って何？」

「正しく聞くっていふ事だ。おまえは、成虫になるまで、成虫になってからここへ来るまでに、何を聞いてきた。様々なことを聞いてきたはずだ。その聞いてきた言葉、ひとつひとつを思い出してみなさい」

ミミズクは、ひときわ大きな耳を震わせながら、そう言うのと、いつの間にか姿を消していた。

ゲンは、キンが言ってくれた言葉を含め、これまで自分に対して言ってくれた者たちの言葉をひとつひとつ思い出しながら、また森の奥へ奥へと続く一本道を進んだ。

またしばらく進むと今度は、『正言道』と書かれた立札があったので、ゲンは立ち止った。するとまた、立札の後ろの大木の影から、いつの間にか一羽のシロフクロウが現れた。

「ホタルよ、何を迷っている」

シロフクロウが、野太い声で言った。

「正言道って何？」

「正しく話すっていう事だ。おまえはこれまで、自分が発した言葉、言動について考えた事があるか。何も考えずに、言いたい放題、しゃっべってきたのではないか？おまえが発した言葉、言動によって、周りの者たちが、どう感じたか、考えてみなさい」

シロフクロウは、ひときわするどいそのクチバシをとがらせながら、そう言うのと、いつの間にか姿を消していた。

ゲンは今まで、自分以外の者の事など考えた事などなく、言いたい事を自由に言ってきた。ゲンはそんな自分を、自分が発した言葉、言動をひとつひとつを思い出しながら、相手がその言葉、言動によって、どう感じたか、考えながら、また森の奥へ奥へと続く道を進んでいった。

またまたしばらく進むと今まで通ってきた道は行き止まりとなっていて、『正言道』と書かれた立札が立っていた。そして今までと同じように立札の後ろの大木の影から、いつの間にか1羽のモリフクロウが現れた。

「ホタルよ、何を迷っている」

モリフクロウが、優しい声で言った。

「正心道って、何ですか？」

「正しい心を、という事だ。おまえはここにたどり着くまでに三羽のフクロウに会ってき

たはずだ。そして、三つの道を受けた。一番目の道として『正見道』、正しく見るといふ道。二番目の道として『正聞道』、正しく聞くといふ道。三番目の道として『正言道』、正しく話すといふ道。そしておまえは、ここにたどり着くまでに、この三つの道の事を考えながら、感じながら、思いながら歩いてきたはずだ。これが、『生』である。おまえが、これまで生きてきた道、『歩み』である。そして、おまえの今の気持ち、これこそが『正心』である。『心』、すなわち『真』、『まこと』という事である」

「ありがとうございます」

ゲンは、モリフクロウにむかって深々とおじぎをした。

「ホタルよ、自分を信じるがいい。おまえは、ホタルなんだよ」

ゲンが頭をあげると、すでにモリフクロウの姿は消えていた。そして、森も消えていた。

アヤメの葉からしたたり落ちてきた夜づゆが、ゲンのほほをぬらす。

「あ・・・」

ゲンは、目覚めた。あの森での出来事は何だったのだろうか？夢であったのだろうか？けれどゲンにとっては、もう夢であろうと、本当にあつた出来事であろうと、そんな事は、もうどうでもよい事になっていた。

「よし、おもいきり飛んで飛んで飛びまくるぞ。光って光って光り続けるぞ。命ある限り、ぼくは、ぼくは輝き続けるんだ。ぼくは、ホタルだ。そう、ゲンジボタルのゲンなんだ！」

ゲンは、おもいきりそう叫ぶと、仲間たちがいる光の輪の中に飛び込んでいった。もうゲンに、迷いは無くなっていた。

(ゲンジボタルの成虫は、オスで平均六日、メスで平均一五日の寿命です。そして食事をとる事はなく、つゆ(水)を飲むだけで、光り続けます。ですからホタルは、昔からセミと同じように短命な昆虫の代名詞となっています。そう、『ホタルの光』は、『命のともしび』ということかも知れませんね。)

(おわり)